

東南アジア熱帯産マダラチョウ類の野外における捕食回避効果

土屋泰三

体内に有毒物質を含むと考えられている東南アジア産マダラチョウ科の蝶が野外において実際に捕食者からの攻撃を免れているかどうか、また翅の紋様が捕食回避に関与しているかどうかを明らかにするために、ボルネオ島の熱帯雨林において、各種の蝶のピーク・マークのある個体の割合と鳥の捕食行動を野外で観察するとともに、各種の蝶の標本を実験的に野外で静止に近い状態で提示して鳥による攻撃頻度を調べた。ピーク・マークのある個体の割合は、マダラチョウ科の蝶は他科の蝶に比べて有意に低かった。また、マダラチョウ科の蝶がいくつかの種の鳥に明らかに無視されている現場を観察することができた。さらに、実験的に提示された蝶に対する鳥の接近頻度はマダラチョウ科に対する場合よりも、体内に有毒物質を含む可能性が低いタテハチョウ科に対する場合の方が有意に高かった。これらの結果は、マダラチョウ科の蝶は多くの鳥類から捕食を回避されていることを示唆している。また、いくつかの種の鳥の攻撃行動の判断には蝶の翅の紋様が利いていることが示された。